

— 第百貳拾五号 —

(2013年秋号)

秋のミニ市&陶磁器まつり

今年の秋は面白くなりそうです。秋のミニ市が11月1日(金)~4日(月・祝)まで始まります。1982年昭和57年が第1回開催ですので、今回で32回目になります。そして、11月3日はコンサートの日と決まっています、青花ブランド誕生時(1976年昭和51年)からのお付き合いである、九響ホルン奏者の山田真様仲間の出演です。今回はお弟子さん達の出演があり、10名の大アンサンブルになりそうです。

また、秋の陶磁器まつりも町主催で11月20日(水)~11月24日(日)まで開かれます。こちらは今回で9回目です。そして、柿右衛門窯、今右衛門窯、源右衛門窯、深川製磁谷窯としん窯登り窯の薪窯響演が新しいイベントとして始まり、お客様にとっては昔懐かしい松煙の風情と匂いに触れて思い出に残る有田探訪になりそうです。DMも出来て工房全員で住所のシールを貼りました。私たちもお客様のおもてなしにあれこれ胸が踊り、心が弾みます。



しん窯青花 秋のミニ市

今夏は有田工甲子園初出場初戦突破で盛り上がり
若者からパワーを戴きました。今秋は私たちが
おもてなしをしてお客様をお迎えする番です。
秋の有田を満喫して下さい。

有工フィーバー

地元有田工業高等学校、通称有工(アリコー)が創部 114 年目にして初めて甲子園出場、そして初戦突破という歴史的快挙を成しとげました。しかも、勝ち試合はすべて 1 点差。サヨナラゲームもあって有田町民一丸となりました。感動をありがたいのフレーズを実感した暑い暑い夏でした。

実は、期間中有田館で思い出の有工野球部写真展が開かれていました。梶原家提供とありましたので、まさかと思って父太郎 2002 年(平成 14 年没)の部屋を片付けていましたら、6 枚も同じ写真が出てきました。それは、祖父智一 1934 年(昭和 9 年没)のユニフォーム姿でした。祖父智一は 1913 年(大正 2 年)に有工を卒業しています。野球のユニフォーム姿は 1911 年(明治 44 年)頃、写真館で撮ったものでした。智一は満 40 才という若さで亡くなっていますので私は知る由もありません。しかし、祖母タツ 1986 年(昭和 6 年没)から生前夫である智一のひととなりをそれとなく聞いていました。野球青年でキャッチャーだったそうです。私が小学校、中学校の野球少年だった頃、キャッチャーだったので今頃になってなるほどと頷いた次第です。

そして興奮もさめやらぬ中、8 月 14 日(水)早朝、甲子園に乗り込みました。甲子園初戦突破の後、当時有中野球部主将だった N 先輩たちから誘われて、勇躍前日から大阪入りし、14 日(水)有工の試合当日は早朝 6 時頃からネット裏の大屋根スタンドのチケットを買う為に甲子園球場の切符売り場に並びました。ついにゲット。早朝 7 時に球場ネット裏スタンドに陣取りました。

今日も猛暑。朝 8 時から 2 回戦 4 試合が消化されます。我が有工は第 3 試合です。午後 1 時半試合開始予定です。お盆休みの中、また熱烈な甲子園ファンのお客で第 1 試合が始まる頃にはあつという間に超満員。私達も余裕をもって甲子園球場入りしたわけではありませんでした。第 1 試合第 2 試合と進むにつれ独特の雰囲気にもしだいに慣れてきました。

いよいよ有工の出番です。生まれて初めて甲子園球場に足を運び、身近な有工球児達の勇姿を手の届くような場所から眺める事が出来て、私の胸の高まりも最高潮に達しました。試合は残念ながら静岡の常葉学園菊川高校に 3-5 で惜敗しました。

地元新聞の大見出しは「有田工、2 回戦で涙」「粘りの有田工最後まで」「無失策で堅守魅せる」「有田工ようやく」「アルプス 4000 人健闘たたえる」「胸張って良か」など有工健児への熱い声援と感動をありがたいの言葉で埋めつくされていました。



1911 年(明治 44 年) 祖父 梶原智一 中列右側 有工野球部時代

タンクの思い出

はじめに

まもなく、約 40 年間連れ添ってきた 10 トンタンクを 1 トンタンク 2 基と交換する。時代のすう勢とはいえ巨大な 10 トンタンクを維持管理する事も難しいが、耐用年数が切れたのである。設置 40 年が限界なのだろう。私たちは今年結婚 41 周年を迎えるが、同じように二人三脚で窯焼き道を歩んできた。10 トンタンクについては思い出があまりにも多くて筆舌に尽くしがたい。

①しん窯入社

私は、しん窯に 1967 年昭和 42 年に入社した。東京オリンピック 1964 年昭和 39 年から 3 年後、日本はまさに高度成長期のスタートに立っていた。しん窯は、燃料革命の中で薪と石炭の併用、それから重油の単窯時代、そして台車で出し入れするシャトル窯。燃料は灯油そして 1972 年昭和 47 年頃ブタンガスが燃料として定着し、窯も 4 m³のコンパクトなシャトル窯に変わった。4 m³の窯 3 基もフル稼働で 50 kg ボンベでは間に合わず、ついに 1973 年昭和 48 年に 10 トンタンクが据え付けられたのである。

②成長期

当時最需要期には、月 2 回タンクローリーが来ていた。10 トンタンクを管理するためには危険物取扱者が必要で、乙種第 2 類の有資格者でなければならない。運転免許証のペーパーテスト並であろうと事前講座も受けず、一発勝負で受けたが見事に失敗。捲土重来を期して予習復習を十分に講座もまじめに受けて二度目の挑戦。無事合格した時はほんとうにホッとした。理系の大学を出ているとうぬぼれていたのも、お灸をすえられたのである。

③青花ブランド誕生

1974 年昭和 49 年オイルショックでもはや資源は有限であると教えられた。高度成長は順調に推移していたが、モノづくりの転換を余儀なくされた。自然界の神羅万象の恩恵を受けてやきものづくりを業にしているのだから、一魂の土、貴重なブタンガスを無駄にしないモノづくりを目指さなければという作る意志がより明確になった。これまでの粗製乱造をあらためて、学生時代にアルバイト先の古陶磁研究家今泉元佑翁から教えられた「後世に残るやきものを創りなさい」という理念を確立した。そして弟や絵描き座職人匠の藤井陽滋と 3 人で 1976 年昭和 51 年青花ブランド誕生に至ったのである。また、1978 年昭和 53 年当時東ドイツマイセン市と有田町の姉妹都市提携セレモニーがあって、ヨーロッパ三大窯業地(東ドイツのマイセン焼、デンマークのロイヤルコペンハーゲン焼、フランスのリモージュ焼)を訪れて、本物や良い物への追求と創作意欲がめらめらと燃えるように沸いてきたのである。

④巨大タンクの設置

ブタンガスのおかげで窯も安定して焼成できるようになった。もともとタンク内は LNG 液化石油ガスが貯蔵してあり、ペーパーライザーで気化してブタンガスに変換する。つまり液化から気化させる為、10 トンタンクの横に気化室(3.3 m³)が併設している。その後、様々な安全規制があり、20 トン地下タンクや散水設備が追加された。工房内の天然井戸から汲み上げて地下タンクに移す為、ポンプ室も設置された。その前に 10 トンタンク下は未整備で土間だった。そこに直接緊急遮断弁に空気圧を送り込む為の小さなボンベが置いてあった。

⑤タンクと葛藤

ある時、窯を焚いていたが炎の勢いが徐々に弱くなっていった。1986年昭和61年、ガス供給が徐々に減って、その原因追及の為、10トンタンク周辺を徹底的にチェックした。もちろん窯を焚いている。ついにつきとめたが、何と緊急遮断弁が閉まろうとしている。つまり、LNG供給が出来ないのだ。何故緊急遮断弁が閉まっていくのか、それは空気圧ポンベの空気漏れが原因だった。とりあえずポンベ点検は後にして、自転車の空気入れポンベで空気を送り続けた。それも冬・夜中。運悪く応援者がひとりもない。窯をダメにするわけにもいかず、ポンベからかすかにもれている空気だったが、空気入れポンベで一晩中押し続けながら当時一窯12時間焼成を乗り切った。後で原因が分かりガックリと肩をおとした。土からの湿気により小さな空気圧ポンベの底が腐食して、少しだが破れて空気がかすかにもれていたのだ。そして、長時間して結果として遮断弁を閉めていたのだ。即タンク下にコンクリートを張って湿気からポンベを守った。10トンタンクは威圧感もあってやきもの工房にはあまりふさわしくなく、景観も損ねていた。しかし時代は高度成長、機械化、大量生産への波は避けられなかった。工房から工場へと本物や良い物を求めながら雇用も増やすという事業家としての夢も追っていた。

1996年平成8年有田地区を中心にして、世界焔の博覧会が開かれ、私は仕掛人のひとりとして、また有田館の製作統括責任者として人生の醍醐味を味わった。青花誕生20周年も同年だった。また、翌年はNHK全国放送「日本の夜」でしん窯から生中継され約500人のお客様を迎え最高潮だった。同じ頃、イワタニ社長様の来訪に合わせ、10トンタンクが見違えるようにお色直した。大きな組織の人間関係に度肝を抜かれた。それ以上に当時の社長さんから「LNGを燃料だけではなくて窯業資材の原料として生かせないかアイデアを下さい」と言われ、その発想の豊かさや視点を変える柔軟な考え方に感心したものである。さすが大企業の社長さんは巨大組織が硬直化しないように常に大所高所から提言されているのだとその姿勢と気宇壮大な思考の持ち主であると思い、さすがとうなった次第である。おかげ様で10トンタンク周辺もきれいに整備され、お化粧品もしてタンク自身も晴れ晴れとして美しく見えた。社長さんの訪問に心から感謝をした次第である。—続く—



1998年当時 イワタニ写ガールの訪問を受けて